

んと焼場に積まれ、箱棺が入るように井桁に組み積まれている。

湯灌が済めば納棺である。戦前は、当地方では箱棺が多かった。昭和三十年ごろから寝棺になったのは火葬場が整備され、重油バーナーで焼くようになってからである。

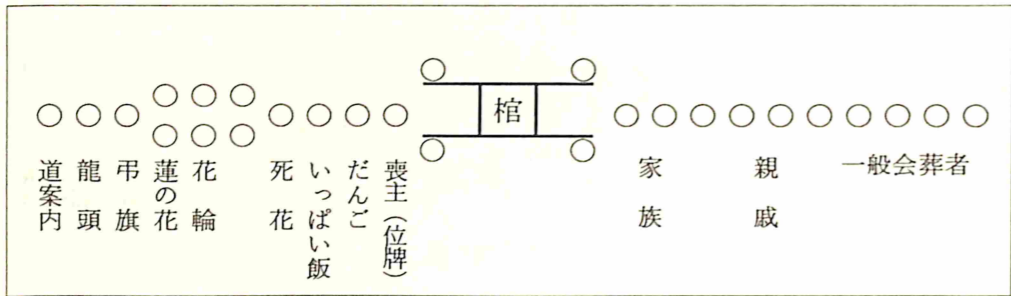
体を拭き終った死者には、喪主および男の子、兄弟らが死装束を着せてやる。逆さ屏風の外から、女たちが心をこめて縫いあげた経帷子を、一品づつ中の喪主に手渡すのである。経帷子は、死者の縁者で、数人で引つ張りながら縫い、糸尻を結ばないで、しつけ糸のようにして縫う。死者が男の場合は、禪からはじまり、手甲・脚絆、白衣を着せて、草鞋を穿かせて、いよいよ納棺である。

納棺のためには、死体にあぐらをかせ両手を合わせ、サンバイス（棧俵）に座らせ、晒木綿で膝から首へかけて死体が動かぬように固定する。そのとき死者の首から頭陀袋をかけてやり、頭陀袋の中には、数珠、米、雑穀、塩に六文銭といって一文銭を六枚（これは三途の川の渡し賃といわれる）、男なら煙草など、女はクシなどの髪道具類、といったものを入れるならわしである。

今は一文銭など無いから五円玉か十円玉。あとは紙銭（紙に百万円、とか、壹億円など書いたもの）を入れるようになった。

地獄の沙汰も金次第といわれるように、この世で貧しい暮らしをしてきた死者を、せめてあの世では極楽の一等地に座らせてやりたいという、残された遺族の小さな希いがこめられているのではないだろうか。

西方十万億土への旅立ちに、空木の杖を持たせてやる。
身内の者の通夜が、葬式の日取りによっては、二晩も三晩も続くことがある。今は、息を引き取ってから二十四時間経過すれば火葬はでき、



野辺送り（葬列）模式図

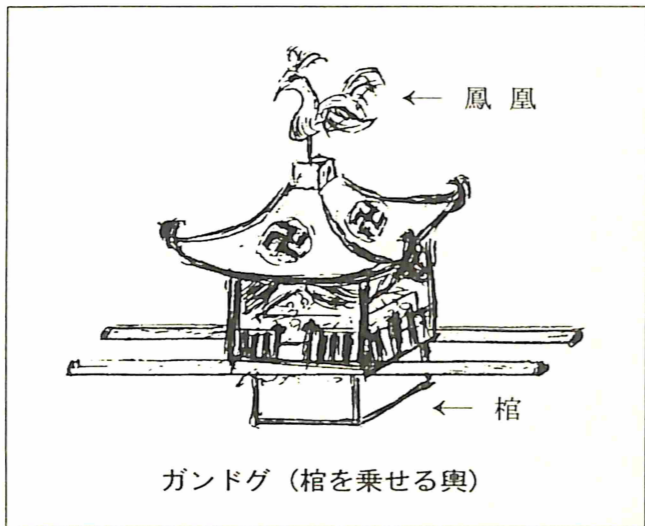
葬列は、道案内、魔払いに龍頭（龍の絵を切り取った紙が棒の先の板に張られている）、甲旗（死者の名を大きく書いたのぼり、これは町内などで贈るのが多い）、蓮の華（老人の場合は白い色、若い人は金、銀色）贈られた造花の花輪、死花（四花ともいう）、一杯飯、団子、位牌（門徒宗の場合は法名か？。位牌は相続人即ち喪主が持つ）、次にガンドグを前後四人で担ぐ。その後には家族、親戚、一般葬者と続く。喪主は晒布を肩からかけ、その布は輿の中に入れて棺をひと巻きして後ろの親族の列に流す。その晒の綱につかまった血族の女たちは涙を拭きふき行列について行くのである。道路の角々には道明しのローソクが立てられており、葬列が進む時、曲り角にすれば先導の僧侶が両手に持った大きな「鋲（シンバルのようなもの）」をジャンと打ち鳴らす。

送葬の列は、肅々と時間をかけて、広場の中をゆっくりと左廻りに三回廻り、中央にガンドグを台に乗せて安置する。正面を本堂に向けて、その前に線香台が据えられ、位牌や団子、一杯飯などが供えられる。（広場で行列が左廻りする時、見物に来た子供たちへ花籠につけてある

火葬した夜に通夜をやるのが普通だが、昔は、葬式のことをダミ（茶毘）といった。葬式と火葬は同義語なのである。そして通夜は、亡くなってからダミを出すまでの夜を親類縁者の人たちが、交代で線香・燈明を絶やさず見守ってやるのが、しきたりなのである。長い夜、朝まで寝ずに死者の横たわる部屋で、生前の故人を語り合うなど、家族の者たちは、病気の世話からの引き続きで疲れ切ってしまった。そこで親戚の若い者たちが、花札やトランプをやり時間を過ごしてゆくのである。

葬式の当日。（葬式は村のお寺の本堂前広場で行われる。）
喪主は、紋服に羽織・袴。素足に草鞋ばき、喪主の妻は、紋付きの喪服に、頭には長い白（晒）をかぶり、素足に足半草鞋（あしながぞうり）をはく。身内の者は、それぞれに紋付き姿に草鞋か足半をはき、女は長い白布をかぶり、男は襟に白い布切をつける。一般葬者は平服である。出棺の読経が終れば、長年住み慣れた我が家ともお別れなのだ。外に置かれた、ガンドグ（正確な呼び名はわからない。棺を乗せる道具。神輿のような物）へ棺を入れる。その時棺は、ふだんの出入口からでなく、縁側などから出す。家の前で、葬列を組んで、お寺まで歩いて行くのである。

「死者が十万億土へ旅立ちすることだから、葬式は、死者を彼岸へ送る儀式だということである。（日本の葬式より）」
死者に贈られた花輪は、殆んど造花の貸し花である。葬式の前日から一週間ほど造花店（葬儀屋）では貸してくれる。花屋（葬儀屋）は葬式の手順など一切の指導をしてくれる。花屋の指示に従って、会葬者の列が家の前の道路に並ぶ。（記憶をふりしぼって野辺送りの模式図を作ってみた。ガンドグもイラストにしてみた。）



お菓子、味噌パンなど与えられるので、普段お菓子など買ってもらいたい子供たちにとっては、ダミを見るため遠くからも集ってきた。人の輪の前に出て、子供たちは手をのべて、花籠に差されたお菓子をくれるのを待つ、三廻りするうちには、全部のお菓子を与えてしまう。これも仏への供養の一つなのである。

供え物の準備が整ったところで、「はち」がジャンと鳴って、それを合図に導師（和尚）が前に出て来て読経がはじまる。何時終るかと思うほど長いお経もあるし、短くさつと終るような時もあり、子供心にも不思議に思ったものだが、お金持ちの葬式には長いお経、貧し

い者の葬式は短いお経と区別したものか、信仰心の薄い者にはお経の意義も知らなかったが、長じて、やはりお布施の高によるものではないかと思うようになった。識者によれば、長いお経というのは三部経を読んだのだから、三部経というのは、それぞれの立場で最も尊重する經典三部を選んだもので、浄土三部経は「無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経」。法華三部経は「無量義経、法華経、観音賢経」。大日三部経は「大日経、金剛頂経、蘇悉地経（そしつじぎょう）」。弥勒三部経は「上生経、下生

經、成仏經」。鎮護國家の三部經は「法華經、仁王般若經、金光明最勝王經」。であると大辞泉に収録されている。

日本には、仏教の中でもいろいろな宗派がある。これも大辞泉で調べてみたら、十三宗というのがあって、次に記してみる。

宗派名	開祖	開基年	主な本山
法相宗	道昭	六六二	興福寺 薬師寺
華嚴宗	審祥	七四〇	東大寺
律宗	鑑真	七五六	唐招提寺
天台宗	最澄	八〇六	延暦寺
真言宗	空海	八〇六	金剛峰寺
融通念仏宗	良忍	一一二四	大念仏寺
浄土宗	法然	一一七五	知恩院
臨濟宗	栄西	一一九一	妙心寺 建仁寺
浄土真宗	親鸞	一二二四	西本願寺 東本願寺
曹洞宗	道元	一二二七	永平寺 総持寺
日蓮宗	日蓮	一二五三	久遠寺
時宗	一遍	一二七九	清浄光寺
黄蘗宗	隠元	一六一一	万福寺

これらは、いずれも古い昔から普及されてきた宗派だが、更に新興宗数も数多くある。この地方では天理教や大和山の信者も多い。

私は今のところ津軽衆だが、本家の宗派は「浄土真宗」、母の実家は「日蓮宗」、叔母の家では「浄土宗」、妻の実家は「曹洞宗」、母方の祖母の実家は「天台宗」、二男の嫁の実家は「時宗」という風に十三宗派の半分近くのお経を耳にしなければならぬ訳である。

理で過ごす。納骨は初七日にする家もあるが、まちまちである。死後七日毎に供養し、四十九日で忌が明ける。

以上が昔のダミ（葬式）の仕来りであった。古いことで記憶違いもあるだろうが、長い時間をかけて記憶を呼び起した記述である。

近年何回か出席した通夜（葬式）で最も思ひ出したのが二件ほどあった。西郡のある村の知人の葬式である。その人とは電話で何回か話した事があっただけで文通は数年続いた。葬儀のお使いがきたので行って驚いた。その祭壇の豪華な事。その村で一番大きな集会施設に、通夜に参集した人も五百人余り、花輪（生花）の数も五十近く。ステージいっぱい設けられた祭壇には、端に水車が廻り、両側に昇り龍、降り龍が電光で動く行灯が並び、白い菊の花で埋めつくされた遺影。私は、そこではじめて本人の写真と対面したわけです。村人の囁きを聞けば、祭壇の費用は二百万円とか。また、こんな通夜にも出会った。町の公民館に飾られた花輪の数二百五十とか、故人と面識もないような人達の名前が麗しく書きこまれ、参会者が式場の大ホールに入り切れず、他の大広間にも座って雑談していたとか。で遺族には気の毒だが、まるでショーにでも来ているような感じ。本来の葬儀の意義から逸脱してしまっている。全く愚かなことである。つい蛇足が出たが、現在の葬儀に至った社会がこんなにも壮敞であるべきセレモニーを狂わしてしまったのだろう。私の生前葬はどんな形にしたらよいか、これから考えよう。

追記

▽門徒宗（浄土真宗）は、団子・一杯飯は供えない。

▽死者へのわらじはなく、白足袋をはかせる。

▽葬送の際も団子・一杯飯はなく、位牌もない。葬列は喪主が何も持

きて、話を前に戻して、導師の読経も終り、引導を渡したところで死者は仏門に弟子入りしたことになるのだという。いろいろと有難いお経を読み聞かせて、この世からあの世へと引き渡したのだ、遺族も又故人との最後の別れの線香をするのである。葬儀を司さる花屋さんの指名で、喪主からはじまり、故人との血縁の順序に焼香が行われるのは現在も同じである。一般会葬者から最後に手伝人の焼香で葬儀は終り、台から棺を取り出して、背中に背負って（焼子が背負ったのか、手伝人なのかよくわからない）焼場へ向う。寺から南の方へ約二百米ほどの土手に囲まれた空地が焼場である。（現在、嘉瀬共同墓所の場所）

畑の中のせまい道を焼場目指して行列は続く。（一般会葬者は解散して、焼場へ行くのは親類縁者だけである。）焼場では既に棺を入れるように薪が井桁に組まれて積んである。薪に火が入ったところで、女たちは手を合せながら、これこそ最後の別れだと泣き呼ぶ。火の勢いがだんだんと強くなり、ひとしきり拜んだところで、一旦喪家へ帰る。

火葬場から帰って来た時、玄関に足を洗うたらいが置かれ、手を洗うための塩と木炭も用意されてあった。手足を洗い、家に入り、ひと休みしてから早目の名食を摂り、夕方（三〜四時間経過後）火葬場へハイサメに行く、その時、焼子（隠坊）に夕飯や酒の料理を持って行くのだ。薪はほとんど燃え尽き、熾がぼかっぼかっとなぎものの如く燃える。真赤になった時には貴賤、貧富は無く皆平等であると感じた。

「骨」に完全な時は、骨上げをし、自宅へ持ち帰って仏壇の前に安置する。宗派によっては、焼場の隅で「屋敷餅」の奇習がある。喪家では、喪主は四十九日魚肉は喰べない。家族は三十五日の間精進料

たずに棺の前に並んだのか、四花を持ったのか記憶は定かでない。

弔旗は贈られた場合先頭に立つが、旗が無い場合が多い。

▽道路の曲り角でジャンと鳴らすはちも門徒宗以外の宗派である。

▽追膳もなく、お盆の飾り棚もなく、何事も簡素である。他宗から言わせれば、「門徒宗のもの知らず」ということだ。

▽嘉瀬の火葬場は、昭和十六年ごろ重油バーナーのカマが建設されたと聞くが、その前までは野焼きであった。

▽野辺送りは、昭和三十一年までは確実に行なわれていた。（私の父は昭和三十一年二月に死亡し、雪の中の野辺送りをした。）

▽葬式も寺の本堂や、公民館、又は自宅で行なうようになったのは昭和三十年後半ではなかったろうか。それから野辺送日も省略されるようになり、葬儀の日より参詣者は前日の通夜に多くなった。

▽亡くなれば暦の迷信友引などにとられることなく（特に門徒宗は）、お寺の都合を聞いて、二十四時間後の最も早い日に、近親者だけで火葬するようになったのも、葬式即ちダミ（茶毘）という言葉が風化する要因であろう。

―参考文献― ○日本の葬式

○青森県の葬式あれこれ

○民俗探訪事典

○大辞泉

火の玉体験記

山中 長三郎

見えた？火の玉。浪岡町の梵珠山で十五夜、恒例の探検登山が行われ、約二百人が参加。二カ所で計十数人から目撃談が寄せられた。梵珠山では、旧暦の七月九日から十日にかけて不思議な光がよくみられ、信心深い人たちの間で、釈迦（しゃか）の墓に高僧の霊が帰ってくる時の後光とも、自然現象ともいわれる。

探検は町観光協会などで行く実行委員が主催し七年目。実行委員の話では、雨降り後の蒸し暑い夜が比較的崩やすいとのことで、まさに今年は「火の玉日和」。午後九時四十分、北中野地区の登山ばやしに続いて、近くの元光寺の齋藤光司住職を先導に次々と入山した。

一行はそれぞれ山の中で好みの場所を見つけて座り込み、深夜までじっと待機していたところ、釈迦堂山頂付近と、六合目の陸奥湾展望所付近で火の玉を発見。

目撃者は「一瞬パッと光って、急にあたりが明るくなった」不思議な体験を語っていた。東奥日報紙に去年、火の玉見えたゾノの記事であります。

私昭和三十八年五月末日午後十時頃、上萩元地区、嘉瀬と一金木とのほぼ中央、津鉄線路と国道三三九号線のほぼ中央点、故今金治、（金一さんの父）の田圃に発生した火の玉を見た体験談であります。

畦道を通り、タデコ（館コ）の畑の中の道を通り抜け奴橋に至る、これは帰りの最を近い道筋であります。此の道を帰ると火の玉は離れ見失うと思ひ、遠廻りの津鉄線路に近い馬車道に行き小栗崎橋を渡って帰る事になりました。

火の玉を追いながら馬車道を歩き小田川近くに来ると火の玉は私の歩いている馬車道より百メートル離れた西の小田川ダム災害警報サイレン塔の近くで仄かな光になって静止している。（火の玉が現れた当時は塔は無かった）私は火の玉のある方向へ行き光りの近くに寄りながら担っていた鍬で身構え、よく見ると、残火が仄みに小さくったり、少し大きくなったりしていた。

残火は故今嘉七さん宅で田植えの苗を早朝から水を張った苗代に入り、苗取りの作業をし寒さが身に滲みると陸に上り酒を一ぱい飲みながら薪火で暖を取ったあとでした。

鍬で残火をしっかりと消し止め、元の馬車道に帰ってしばらく残火のあった方々を見ていたが再び火の玉は現れませんでした。

しかし此の残火が北五百メートル今金治の田まで南二百メートル賽の河原境内迄で合計七百メートルの距離を変型したりして飛び交う事があるだろうか。

その晩は暖く曇った夜で翌朝は早くに雨が降りました。

火の玉は何故に発生したの私には何も解りません。

自然界の不思議にただ驚嘆するだけであります。

「津軽霊場川倉賽の河原地蔵尊の由来」地蔵尊に関する伝説は古く、数千年前、此の地方の天空に不思議な燈明が飛来した時、その光り照らされた場所より発見された物だと言ひ伝えられました。

田植えするための代掻き作業（田の中に水を漲り土の塊りを砕き泥にする）に必要な水を今金治さんの北隣の田に流し入れ、見廻りも終り、最後の水口を調整し、かえろうと頭を上げた。瞬間一かえり道の途中の五十メートル前方に火の玉が燃えている。かえりの道筋を歩きながら火の玉を眺め、二坪ほどの広さの今金治さんの休憩小屋迄で来たところ、その小屋より東側に十メートル離れた、今金治さんの田の畦畔で火の玉が燃え上っていたのでした。無我夢中で火の玉の方向に行きました。あかりは畦畔の草叢も見え、目もくらみ、体は夕日に包みこまれた感じでありました。

火の玉にあと一步の所まで寄ったが、その時、火の玉はスート小さくなり、懐中電燈のような小さい光りと変って小田川と賽の河原の境内の老松のあたりに去り又私の近くに來ては又去ります。当時は小田川ダムの災害警報サイレン塔と賽の河原お堂の北側にも家はなく、賽の河原境内へ金木まで見通しもよかったです。

私の心の中は穏やかではありません。私の子供は生れて百日ほどで死んでいます。しかも、それまでとつても元気だったのに一夜にして急死されたのです。

火の玉を見た年は子の七回忌に当たっているようでした。

「川倉地蔵尊のパンフレットより」。

津軽弁、嘉瀬の小話集

(1) 「飲ムナ？」

集団就職した金九郎の娘マリが、二年ぶりに東京から帰って来た。男友達と一緒に、しかもおなかは、大きな西瓜を入れたように、ふくらんでいた。

それでも金九郎夫婦は、二人を大いに歓迎した。

「若い者、酒コ飲ムナ、ビールコ飲ムナ、それともウキスキー飲ムナ、焼酎飲ムナ、なに飲めば」

金九郎は、将来の婿殿にすすめた。

若い男は、ごくと喉をならし、黙っていた。

娘「どうしたの、何か飲まないの」

男「お父さんが、酒飲むな、ビール飲むな、ウキスキー飲むな、焼酎飲むな、というから飲まれないよ」と、しょんぼりしていた。

(2) 「吐く」と「掃く」

三九郎のミツが急に腹痛を起し、診療所の先生が往診に來た。

先生は部屋に入るなり、ミツの傍に坐っていた婆様に、「吐きましかか」と尋ねた。

婆様「掃きも拭ぐもしねはで、汚ねくてし」

看護婦「吐けば汚ねども、吐かねばきれいだでは」

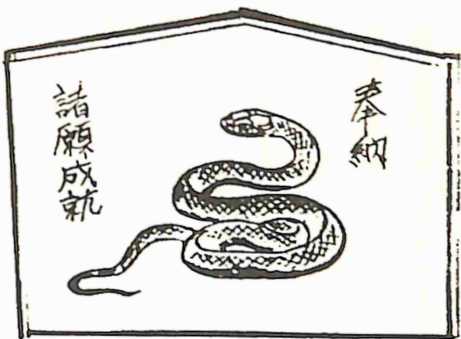
婆様、むっとして

「ワイハ、オメヘバ掃いだことねえんだが」

（木村）

村の怪奇談

秋元 惣之進



私が子供の頃 老人や世間から聞えた村の怪しく不思議なさまを記憶を辿りながら綴って見たいと思うが 今の若い人々は科学万能の時代に怪奇などは幻想 幻覚だと一笑するかも知れないが電燈も無かった時代で有り 夜は真暗闇で「ローソクとランプ」に頼った時代であった
闇夜に白い物体が見えたり明るい光りが見えると幽霊や火玉と騒いだ 又 呪いの藁人形や罪も無い動物を殺したりすると祟りがあるとか 其れは迷信だよと言うかも知れないが 科学も医学も進歩していなかった時代だから其の時代に即応した現象だと思ふ

(恨めしそうに眺めていた幽霊)

数十年前の二月上旬 嘉瀬の某家の一人娘に婿がくると言うので祝言の支度で賑わっていた

某家の娘は美しく男勝りの働き者でした 婿を貰って見ると婿は病弱でしたが毎日 牛馬の様に働らかされた 婿は次第に痩せ細り身体が弱まって遂に病床に寝付いて動けなくなった 働けない婿は用が無えと娘の両親は婿を家から離れた小屋に移し飯や魚は勿論与えず家族の残した雑飯を僅少与えるだけで動けない婿は糞尿に塗れ遂にあの世の人となった 某家では一度目の婿が他界したので「二度目」の婿を迎えた 其の日は夕方になるにつれ激しい吹雪となった 二度目の婿は馬櫓に

し家屋敷も人手に渡ったと言う

(井戸から幽霊の泣き声)

今か五十数年前に聞いた話である。 嘉瀬でも屈指の資産家の娘は 村某村の若者と恋仲になり親の反対を押し切り結婚した。結婚後 若者は体調を悪くし一年以内に他界した。 夫なき後 娘は生活に支障をきたした 今日のように仕事も無く生活するのが困難で頼るのは生家の外に無く時々 生家に来てはお米やお金を恵んで貰ったが生家では何時も不味い顔をした 或る日 生家の主人は娘に親の反対を押し切り結婚し 又 お米やお金を強請に来てお前は吾が家を喰い潰しのか お前見たいな人は死んでしまいと強い口調で言った 娘は村でも屈指の資産家なのに私一人位に喰わせられないのかと思ひ胸中で何時も泣いた 或る年 娘の生家で祝言があった 其の日も娘には冷たく当るのだった

娘は祝言の後日 屋敷内にある井戸に投身自殺を計り死亡した 其の日から夜になると井戸から亡霊の泣きがして火の玉が飛び幽霊が出る村中は大騒ぎになった 娘の生家では早速 井戸を埋めて霊能者を呼んで供養して貰ったら火の玉や幽霊が次第に見られなくなったと言う。

(火の玉が田圃から家迄、追って来た)

今から六十数年前「リヨ」は息子が二才になるとき夫に死に別れた農家だったので毎日が多忙で田植が終わると一人身の「リヨ」は夫が亡き

何時の間にか人影が消えて居た 手伝いの女達は二度目の婿を見た時である。背後が突然「ひんやり」と冷い感じがしたが一人の手伝婦が戸口を見て震え上ったのである 戸口の掛簾の間から二度目の婿と嫁を見ているのは一度目の婿でした 白い着衣と白い手甲 白い布を額に付け恨めしそうに見ていたのである 戸口から激しい吹雪が吹き込むと「ランプ」が一斉に消えた 手伝の女達は悲鳴を上げ自分達の家へ逃げ歸ったが女達が途中で後ろを振り向くと祝言の家の屋根の上に青白い火の玉が尾を引えて出たり入りたりして居ったと言う

間も無くその家では両親や娘と二度目の婿も原因不明の病気で他界後は男勝りの毎日だった 田植が終わった後は水不足な嘉瀬の水田は夜水引きに苦労した 或る夜「リヨ」は二才になる息子を寝かせてから真暗な闇夜に一人で夜水引きに鎌を持って出掛け、水田に水を掛けておると水田から約一五〇〇米位離れて居る向うの狐崎から「幽か」に明るい光が見えた 誰かが提灯を持って田圃に水を掛けて居るのだと思つて居たが明りは火の玉となり次第に大きくなり「リヨ」の二〇米位の手前まで近付いて来た 「リヨ」は化物か狐火か 又は火の玉の化物かと恐怖心で身震いし水田に水を掛けるのも忘れて持つて居た鎌を振り廻して自分の家迄は一五〇〇米位の距離を一目散に鎌を振りながら必死で逃げてくるのに なお火の玉は「リヨ」を家の近くまで追って来たと言う 其れから「リヨ」は夜水を引えた事が無いと言う

(毛の生えた男の脚が寝ている女の布団の中に入った)

これは吉崎忠直さんの母から聞いた話

鍛冶町の木下正義さんの祖父が病で寝て息を引き取るのは今か今かと付人達が心配していた 其の晩は一寸先が見えない程の猛吹雪だったと言ふ 其の日 吉崎忠直さんの母の姉(桜田)が吉崎さん宅に用事があつて遅くなったので一晩泊らせて貰う事になった 夜の一〇時も過ぎたので家の上居に一人で寝ておると家の中の上居の戸がコトコトと音がしたと思うと桜田の姉の寝ている布団の中に冷い風と共にポオーポオーと毛の生えた氷の様に冷たい男の脚がスート入り、吃驚りした桜田の姉は「あっ」と呼ぶと家中の人々が起きて来て「どうした」と一人で

寝ておる桜田の姉の所に行くとは姉は震えながら眞ッ青な顔をし今迄の事を話した。其の晩は木下さんの祖父が亡くなった晩だと言う。

吉崎さんのすぐ手前の沢田定義さんは木下さんと親戚に当り一寸先見えない猛吹雪の為に木下さんの「祖父の靈魂「タマシ」が沢田宅迄行けず迷って吉崎さんの家に行ったのだと言う。

注 上居（ジユウ）常居（イノナカ）

（三途の川（冥土）迄）

行ったが戻って来た息子）

私の息子 秀人は生れ付き運動嫌いで学校へ通う時も急がず「ユウツクリ」歩く子供でした。或る時 西北病院で精密検査をして貰ったら先天性心臟病（ツアノーゼ）と判明 以後 西北病院に二回 弘前大学病院に二回 金木病院に四回 札幌大学病院に一回 計九回の入院生活でした。

金木病院に三回目の入院の時でした 院長はあと数時間の生命だと宣告されたが 其の後 秀人は息を吹き返し蘇生、眼を開き始め正常に戻った。秀人は拾数人いる付人達の前で前置きしながら「夢かも」知らないが急に目の先が眞暗闇になったかと思うと周囲は眞暗なのに眞中だけが薄明るい道路で両側には見た事も無い綺麗な花が満開で花の道を歩いて行くと前面に大きな川が有り 川を見渡すと向岸に二人の人影がおり良く見ると古町の外崎さんの息子Aさんと後町の鳴海さんの息子Bさんが私を呼んで「秀人」私共はお前を迎えに来たのだから 早く其の川を渡って「こっちへ 来いよ」と手を振って呼ぶのでした。

生前中のAとBとは友人でも無く年令も相当に違うのに普段は道端で

（老松に炎のインツコが下がっていた）

昭和初期 嘉瀬の某老人が息子と二人で夏の道路を五所川原から嘉瀬へ歸る途中 馬の荷車に乗って長富の溜池の水門付近迄くると日がとつぷり暮れた 今迄元気で歩いていた馬が急に声高く「ヒヒン」と大声をたて、鳴くと道路の上に立止った。

主人と息子は手綱を引いて「シッーシッー」といくら叫んでも動かない 息子と老人は荷車から降りて見ると 長富の溜池の水門の所の大きな老松の枝に真赤な火の玉の「インツコ」が炎となって燃え下がっていたと言う あまりの恐怖に老人は腰を抜かして動けなくなったが若者は老人を荷車に乗せてから、馬の手綱を引いて一目散に家へ逃げ返ったと言う 二人があまり遅いので家族は門前で待つておったと言う。

（蛇の祟り）

某町内の人が病気になる。医者に診て貰ったが治らない 本人は只身体が「だるく」仕事が手につかない 霊能者へ行って拜んで貰ったから あなたの家族の人が野原で蛇を殺した祟りだ 其の蛇は水を呑むに來た神様のお使いだと言う 早速家へ歸って家族に話したら家族の若者が野原へ干草を刈りに行った時に蛇を鎌で一匹殺したと言う。

又 早速霊能者へ行って拜んで貰い霊能者にどうしたら病気が治るか聞いた所 霊能者は私が蛇の絵馬の「額縁」に蛇の絵を書いて供養して上げるからと言われ 幅、縦、横、各一尺位の額縁に蛇の絵を書いて霊能者と二人で八幡宮へ行きお神酒や魚お菓子などを供え蛇の額縁を神社の境内に立て供養して貰ったら病気が次第に快復し癒ったと言う。

合っても言葉も交した事も無いのにと思っていたがAとBは、又大声で秀人そっちで苦しんでいるよりも其の川を渡ってこっちへ來たら自由気な極楽天国だよ」と呼んで手を振るので、

秀人は「私の弟が今北海道に旅行中で明日家へ歸るから其れ迄 待つてくれ」と答えたならAとBは では弟が歸って來たら待つて居るから早く来いよと言ったと言う 弟は其の日に金木病院に着いたが秀人は弟の歸るのを待つて居たのでしようと付人達は言うた。

其れから一年後の二十三才の時に金木病院であの世の人となった。

（呪いの藁人形で

逆に自分の目が失明した女）

小学生の頃 盲目の婦人を見て或る人が あの女は呪いの藁人形で呪いが叶えられず自分の目が失明したのだと言う事を聞いた。

其の女は或る人を心底から憎んだ 女は或る日 人に見られず こっそりと 約一尺位の藁人形を造り真つ暗な夜中に人目を忍んで八幡宮境内の太木に藁人形を下げて魚やお菓子を供えてローソクを灯し 憎んで居る人の名前を呼びあの人の目が必ず潰れる様にと藁人形の目に五寸釘を刺して一心不乱に金槌で打ち續けたが折願が叶いられないのか数日後に自然に自分の目が失明したと言う。

呪いの藁人形は憎い人の目に釘を刺すと目が潰れ 腹に刺すと病気になるに脚に刺すと跛になると言うが呪いが叶わないと逆に自分に祟りがくると言う。

人を呪わば穴二つ

（屋根の上に火柱が）

昔から火柱が倒れた方向は火事になる 火柱は火事を予告すると言う 今から五十数年前のある夜に一人の男が夜道を歩いて 某家の前を通りかかった時 某家の屋根の上に火柱が真赤に燃え其の火柱がやがて消えた。

其の次の晩に某家は火事になり全焼した。その時普段はいなかった純白の鳩が火事の上を飛んで行ったと言う。

（八幡宮に火の玉の提灯）

夏の暑い晩に夕涼みに外へ出て畑中の橋の上で散策をしておると西側の八幡宮の入口付近の鳥居に真赤な火の玉の提灯が下がっておるのを見た人々が数十人おり火の玉の提灯が八幡宮の太木に下がると嘉瀬に不幸が起きると聞いた事がある。

（狐に 魚を取られた）

鍛冶町の某は金木に用事があったので用事を済ませ 其の帰りに町の魚屋から魚を買い袋に入れて手にぶら下げて（持つて） 歸り 町外づれから嘉瀬の方を見ると電燈の明りがチラホラと見えた 時間も遅いので村を目指して急いだ 歩いて居る途中に村の灯りが自然と見え無くなり いくら 急いで歩いても村には着かない 急いで雪道を歩くので身体が汗で濡れ身体がヒンヤリと冷える感じがして手を見ると町から買ってきた袋に入れて持つて來た魚が一切れも無い。

普通だったら畑中の橋を通って家に着いていなければならぬのにと